三島小理科レポート

2019年度　1140
四国中央市立三島小学校
田中正史

1398　「2011生徒会通信」3/10

理科準備室の片付けをしていたら、前の学校で作った生徒会通信が出てきました。
今年は、震災を振り返る授業ができません。この通信で９年前を振り返ります。

○２０１１年５月２３日「四国中央市消防署の渡邊さんのお話」

震災直後に志願しました。愛媛県で１００人が派遣されました。岩手県釜石市に行きました。行くのに３日（原発事故で足止めされたから）、現地で２日、帰りに１日です。

現場はがれきの山で道がふさがっています。車は入れません。全て手作業です。がれきを一つ一つのけて、板を一枚一枚のけて、その下に人はいないか、歩いて捜しました。がれきの下に埋もれている人を見つけてあげたい。だけど、逃げることができて、「この下にいないでくれ。」と願いました。

家に帰って敷地に入った時に「帰る家があってよかった。」と本当に思いました。温かい食べ物、やわらかい寝床、帰る家。それがどんなに幸せなことか。当たり前に思っていることが、実は本当に幸せなことだと気付かないといけません。

○２０１１年９月１８日「福島の今～８月に出会った被災者のお話」

山形に避難している３０代の父親です。政府の支援による温泉宿で寝泊まりできます。子どもと一緒にいる時間が増え、ありがたいことです。けれど、父親の働く姿を子どもに見せたいです。その思いがかなわず、いつまで避難生活が続くのか分かりません。そのストレスがたまるのか、ささいなことで夫婦ゲンカをします。言いようのない将来への不安を感じます。このままでは心が腐っていくのではないか。

道路や港など、目に見える復興は進んでも、そこで働き、暮らし、生きていく日常が戻らない限り復興はほど遠い。学校や家の周辺だけ放射性物質を取り除いて「生活できますよ」と言われても帰れません。この子どもたちが大人になった時、村や町は、帰ることができる故郷になっているのでしょうか。

★　あれから９年。被災者、被災地の心の復興はどれだけ進んだのでしょうか。
東日本大震災の被災者の経験を、南海トラフ地震をひかえた私たちは生活に生かしていますか？